
DEVIL HERO

D E G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVIL HERO

【Nコード】

N7730D

【作者名】

DEG

【あらすじ】

「魔王」を倒すための「勇者」として呼び出された、間の抜けた男アディン。しかし魔王を見た彼は事実を知る。——魔王など初めからいなかったのだ。そして勇者も……

勇者（前書き）

どうも！本作は表現そっちのけで物語だけを書き連ねただけのもので、世界観が伝わりにくいかもしれません……気軽に読み下さい。

勇者

ここは剣と魔法の世界。

魔王という存在に人々は恐怖に脅かされ、混沌としていた時代。

人々は世界を救う勇者を待ち望んでいた。

——と言っても、それはごく最近になってからの話である。

「いよいよですな……」

「うむ……果たして噂通りの勇者殿なのか……」

ある大きな広間では、大勢の従者の中に一人の男が鎮座している。

その隣には、彼の秘書役を務めるもう一人の男が立つ。

「……………」

彼らは、ある人物を待っていた。

しかしその人物はなかなかそこに姿を現さずにいた。

「ちよっ…………いえ、私は…………その……!」

静まり返った広間に女性の声が聞こえた。

「ねえ、そんな事言わずに食事だけでも」

「……………」

一同が外の会話に耳を傾け、続いて男性の音が響く。

「で、ですが……………私などが……………」

「いやいや、俺勇者よ？勇者とデートなんてもはや伝説レベルだよ？……………じゃ君、どう？仕事終わってからだけど」

広間が再び、緊張とは別の意味で静まり返る。

「……………いや、うん……………まさかな……………」

鎮座する王が、焦った口調で口走る。

王だけでなく、そこにくるはずの人物を待っている皆が激しい不安を抱いた。

その時、広間の扉が開いた。

広間の視線が、その人物に注目した。

「……………ちえ……………お呼びでしょうか、国王陛下」

不謹慎な会話の主が、王の広間に入室した。

そしてその男の最初の仕種が場を沈黙させていた。

「……お…お主か？」

「はい、私が勇者。勇者アディンと申します。勇者の」

勇者を三回強調しながら男は名乗った。

格好は一応それらしく、肩や胸に防護板を装着し、帯剣もしておりマントを羽織っている。

「そ、そうか、アディンと申すか」

「はい。勇者の、アディンです」

またアディンはしつこく勇者を主張した。

態度だけは勇者という言葉が見当たらない凶々しさを込めていた。

誰もが啞然としていた。

王も次に繋げる言葉を、何故か探していた。

「…王…王…！」

いち早く頭を回転させた秘書が王を促す。

「あ…ああ！…アディンよ、そなたを呼んだのは他でもない。そなたに世界を救ってもらいたいのだ」

王はようやく、決まり文句を言うように語り始めた。

「そなたも知っているだろうが……今、この国は魔王の脅威に曝されておる。五年前に突然現れた魔王は、人々に恐怖を与え続けているのだ。一刻も早く打ち倒さねばなら……」

が、王の口がまた止まった。

アディンは王座の目の前で胡座をかいて、大きな欠伸をしていた。

「……？あ、どうぞ御続けください国王陛下」

言葉遣いだけは丁寧にアディンは言った。

が、今度はあらぬ方を向き始めた。

王は思わずため息をついた。

そして小声で秘書に話した。

「何故このような者が勇者に選ばれたのだ……」

秘書も呆れた目でアディンを見ながら小声で返す。

「仕方ありませんまい…アディンと言えば、誰もが知る我が国最強の戦士です。しかし……」

「うむ…噂通り、女好きの不心得者のようだな……」

王はもう一度アディンを見定めた。

勇者は鼻に指を突っ込んでいた。

王はまたため息をついた。
。

「……あの噂も、本当なのか……？」

「おそらくは……」

「本当ですが」

王と秘書はギクリとした。

アディンは真面目な顔付きで二人を見ていた。

「魔王を倒すことに、何か問題が？」

「い、いいや何も問題はない」

王は慌てて首を横に振った。

そして急いで用件を伝えようとした。

「そなたの腕を見込んでの頼みだ、我々では手に負えん、どうか魔王を打ち倒してくれ」

アディンは王の様子を見て、何とも言い難い顔をした。

そして急に立ち上がった。

「わかりました、お任せ下さい陛下」

その雰囲気が皆の思い描く勇者像に少し匹敵したので、広間に並んだ人々は尊敬の目で彼を見た。

「おお…頼むぞ勇者アディンよ！」

「で、報酬の件ですが」

一瞬にして勇者への視線の意は元に戻った。

王も虚をつかれたような顔をした。

「私一人で魔王を倒せというんですから、それなりの恩賞はもらえ
ると思って構いませんね？いくら勇者といえどもギブ・アンド・テ
イクには逆らえません」

周囲の視線はさらに冷たくなった。

王は情けない声でやっと返事をした。

「ああ…つむ、構わんが…」

「では」

アディンは、ほんの少し前にもしていたであろう卑しい笑みを零した。

「貴方の娘、ここの王女を戴きましょう」

いきなり魔王のような発言を勇者はした。

が、王の反応はそれほど驚いた様子ではなかった。

「いや…実はだな」

それどころか、ばつの悪そうにした。

「王女は……魔王に……」

王はさらに重い表情になった。

そして広間の空気も重いものとなった。

「さらわれた、と？」

「うむ…とらわれて…いるのだ」

アディンは楽しそうにした。

「では魔王に囚われたお姫様を勇者が救うわけですね」

「ああ……王女をお主の妃にしてやろう。救うことが出来たら、な
……」

王は妙に言葉を濁した言い方をした。

が、勇者アディンはそんな様子を気にも留めずにまた一歩踏み出た。

「わかりました。この勇者アディンが魔王を倒し、王女を戴きます。勇者が」

その言葉に明らかな煩惱が込もっていたためか、今度は誰も勇者を見る目で彼を見なかった。

アディンは一礼をした後、広間を去った。

「……あ、君ごめんね、予約が入ったからまた今度……」

一同は再びため息をついた。

「……ふう……大丈夫だろうか……」

王のため息は、しかし別の不安だった。

「何とも言えません……どちらにせよ、うまくいけば魔王は消えるでしょうが……」

秘書も難しい顔で答えた。

王はもどかしい心地を現したように頭を抱えた。

「ああ……ルビーナ……何故こんなことに……」

事実を知る者達だけが、一層苦悩していた。

魔王

「さて、もう着いてしまった」

アディンはある城を目の前にしていた。

周囲を暗雲が覆い、人間を拒むような異質の空気が漂う場所である。

「ここに王女がいて、魔王を何とかしたらいいわけだな」

しかしアディンはそんな空気すらも平常のように独り言を言った。

「さて、どんな女の子かな…まあ玉の輿はついでだし。とりあえず探すか」

勇者は魔王の城へ踏み出していった。

「……………ちよつと展開早いかな」

ものの10分も経たないうちに、アディンは魔王城の最上階へとたどり着いた。

「まあこんなもんなのかな…力使う必要もないし」

彼の持った剣と装備には大量の血が付着していた。

しかし彼自身は無傷だった。

「まあ…俺勇者だし。強いから、もう魔王倒して王女もらってハッピーエンドってことで」

アディンは魔王の間へと続くであろう扉に手をかけた。

アディンはその先へ足を踏み入れた。

と、ボツボツと暗闇を炎の道が照らし出した。

炎が最後に照らしたのはある人影だった。

「——何者だ？先程から私の城で暴れているのは」

その魔王らしき影が声を出した。

黒い仮面をつけ、ローブに包まれフードを被ったその姿はいかにも妖しい。

が、アディンは別の点で驚いた。

「…お前が魔王か？」

「……そう、私が魔王だ。ここまですり着いたということはそれなりの力の持ち主なのだろう。誉めてやるぞ」

再び魔王の声が暗い間に響いた。

そしてアディンの疑問はさらに強くなった。

「だが私の魔法にはお前は」

「なんか…声高くない？」

アデインは率直に聞いた。

魔王に対して何等恐怖を抱いていない口調だった。

「！だ、黙れ！！」

感情が高ぶった魔王は高い声で叫んだ。

「貴様何者だ！？」

「俺は勇者だ。勇者アデインだ。勇者のな」

アデインはまた勇者を三回口にした。

そして剣を構えて、今度は少し真面目な声で魔王に言った。

「お姫様はどこにいるんだ？」

「何？」

「この国の王女だよ、お前が捕まえたんだろ」

魔王は一瞬何もしゃべらなかつた。

が、仮面の下で笑うと、再び魔王らしい口調で言った。

「ふっ…私を倒せたら教えてやるっ」

「なんだ、だったら早い話ね」

アデインはそう言うと、凄まじい速さで斬りかかった。

「……………おっ!？」

「弱い!!」

魔王は手を翳し、空で勇者の剣を受け止めた。

と同時に、その手から激しい発光が起きた。

「ぐえっ!」

アデインは発光に激しく吹き飛ばされ、体を石壁にたたきつけられた。

「ふん…貴様本当に勇者か？たわいもない…」

「いてて……………」

アデインは肩を抑えながら再び立った。

「ほう…頑丈だな、ただの人間にしては」

「いや……………」

瞬間、アデインは魔王の眼前に飛び込んだ。

「ただじゃねえっ！」

「なッ……！？」

魔王は咄嗟に身を引いた。

届いた剣先が魔王の仮面を縦に裂いた。

「……っ！！」

「？！ぎゃっ」

魔王は素早く魔法を発動し、アディンをもう一度吹き飛ばした。

「ってえ………え？」

倒れたアディンが上を向くと。

魔王は不思議な行動に出ていた。

「……………」

二人は沈黙した。

勇者はただ魔王を見ていた。

魔王は、フードを深く着込んで顔を隠そうとしていた。

しかし隠し切れずに素顔がほとんど見えていた。

もはやその様子に、魔王の二文字は見当たらなかった。

「……………なあお前」

勇者の声に魔王はピクツと反応した。

「女でしょ。しかも人間」

「……………！！ち…ちが…」

仮面が取れ、箆らなくなった魔王の声は一層高く聞こえた。

もはや戦意を感じなくなった魔王の女に、アディンは言った。

「まあ…いいんだけど。誰にも言わないから、お姫様の居場所を……………」

「……………いない……………」

女は短く言った。

そして突然、怒ったように叫んだ。

「あの国に王女なんていない！！！！！！」

女からとてつもない衝撃波がほとばしった。

勇者の姿

「今頃…勇者殿は魔王と闘っているのだろうか…」

玉座では、王が不安げな声を漏らしていた。

「どういう結果にせよ……勇者殿には魔王を打ち倒してもらわねばなりませんな」

「うむ……そうだな……」

その時、また広間に声が聞こえて来た。

「どうなさいました勇者殿……いてっ!」

「ゆ、勇者殿!?!」

騒ぎ立てる声と共に、王の広間の扉が乱暴に開かれた。

ボロボロの姿になった勇者アディンは、後ろから来る者達に構わず、ズバズカと王の座に近づいていった。

「ゆ…勇者殿!早かったな、魔王は……」

「なーにが魔王だクソ親父が」

アディンがそう言うと、王の広間にいた者は絶句した。

「魔王?あーそうたしかにあの女の子はすごい魔力を持ってたよ、

国一つ滅ぼせるくらいだな。危うく俺も死ぬところだった。だがそんなのはどうでもいい」

もはや勇者でなくなったアディンは、さらに続けた。

「王女いねえじゃん！魔王が王女なんかいないって言ってたぞ！どーしてくれんの！？」

勇者どころではない悪漢のような態度で、中指を突き立てながらアディンは王に叫んだ。

王は口をあんぐりしていたが、しばらくすると大きなため息を吐き出した。

「……………わかった。……………全て話そう」

王の落ち着いた態度に、アディンも平静を取り戻して話を聞いた。

「先に言っておくが……………この国に王女はいる。いや、いたと言ったが正しいか……………五年程前の事だ……………私の娘……………王女はちょうど十歳になり、ある儀式を行う事になった。我々の王家一族は、代々強い魔力によって王の役割を果たして来た。儀式とは、その一族の者の魔力が王に相応しい力量かどうかを見定める試練だったのだ」

アディンは懐かしむような王の声を黙って聞いていた。

「ルビーナ……………あの娘は素晴らしい才能を持っていた。我々はその王女こそ一族最大の王になると思っていたのだ」

「だが……………その十歳の儀式の時……………魔力の器を計ったとき、王女の力が爆発した」

王の顔は、次第に苦虫を潰したようになった。

「あれは……今でも忘れられん……あの力のせいでこの国は滅びそうになった……多くの者も犠牲となった……」

横にいる秘書も顔をしかめていた。

「それ以来から……ルビーナは姿を……消したのだ……」

アデインは黙っていた。

王も話し終えた後、俯いていた。

「……五年前」

アデインが口を開いた。

「魔王が現れたってのも五年前。王女がグレたってのも五年前ね」

「……その通りだ」

王は俯いたまま答えた。

アデインは素早く続けた。

「まあどんなアホでも全部繋がりや出る答えは一つだわな」

「だが、仕方あるまい……！国民が恐怖に脅えているのも事実だ……！」

王は俯いたまま苦しそうに言った。

「お、お……王……」

と、秘書が突然声を震わせた。

王はついに顔をあげて言った。

「頼む勇者殿！魔……………王……………」

王の声は途切れた。

「勇者？なんだよ勇者って、あんたの尻拭いすんのが勇者か？ふざけんなよ」

アデインの声は野太くなっていた。

広間にいた従者達が震えながら槍を彼に構えた。

「き、貴様……！」

「あのさあ、今俺結構腹立ってんのよ。なんなの、やっぱり人間て皆こうなワケ？化け物には化け物をつてか？んで用無しになったらまたゴミ扱いか？」

アデインは自身に刃を向ける兵達を見下ろした。

そして王の方を向いた。

「初めは面白かったよ、勇者勇者って俺の事ちやほやしてさ。悪くなかったよ。でも結局これだ」

「あ……あわわわ……」

王はガクガク震えながらアディンを見ていた。

「……まあいいよ。勇者くらいやってやるよ。仕事だからな。腹立つけど」

アディンの声は、また元に戻っていった。

広間の緊張が和らいだ。

アディンはまた広間から出ていこうとした。

「す……すまない……」

「俺に言つなよクソ親父」

去り際にアディンは背後に向けて言った。

魔王の姿

少女は嬉しそうに言った。

『私、すごいんだよ！先生にすごいって言われてるんだよ！』

王も嬉しそうに返事をした。

『ハハハ、そうか！ではこの国は安心だな！頑張るのだぞ！』

少女は笑いながら駆けて行った。

『準備はよろしいですか？』

『はい』

少女は老人に固い返事をした。

老人は笑って言った。

『緊張することはありません、自分の精一杯の力を出せば良いのです』

『…精一杯？』

『はい、思つように魔力を解放なさってください』

少女は頷いた。

周囲には王や、沢山の人々が集まっていた。

『では、始めますよ』

老人が手を空に翳した。

すると少女の周囲がきらきら輝き出した。

少女は力が漲る気がした。

『……！……』

少女は魔力を解放した。

少女からまばゆい光が放たれた。

『うつ……！……これはすごい……』

王が驚いて言った。

『……！？……くっ……うっ……！……』

老人がうめき声をあげ始めた。

周囲がざわつき出した。

『……！……』

少女はさらに力を込めた。

少女の光が一層大きくなった。

『な…なんだ！？』

『う……うわあああああ！……！』

『王！お逃げ下さ……』

疲れ切った少女はゆっくりと目を開けた。

『…………え……？』

先程とはまるで違う光景が映っていた。

人々が瓦礫の中に倒れていた。

遠くで一人の男がよろよろと立ち上がった。

『あ…ば…化け…物……』

男はすぐに倒れた。

近くでまた別の声がした。

『ま……魔王……だ……魔王の化身だ……！』

少女は振り返った。

先程笑ってくれた老人が倒れていた。

王が傷だらけで震えていた。

少女は自分の手を見た。

少女は震え出した。

『ま、魔王を殺せ！！』

そんな叫び声が聞こえた。

少女は走り出した。

少女の体は震えていた。

少女は泣いていた。

仮面を付け、黒いローブにフードを着込んだ魔王は静かに立っていた。

ある小さな魔物が魔王に近づいていく。

「……………ううん、大丈夫」

魔物は魔王に、自身の尻尾をぺしぺし当てた。

「おいでよ」

魔物はいくつもの尻尾を使い、魔王の肩に登っていった。

魔王は肩に乗った魔物を人差し指で触った。

「また…誰か来るよ。私を倒しに……」

その時、魔王のいる広間の扉が開いた。

ギギイーツと軋む音の後ろから、男が現れた。

魔王は低い声で言った。

「……よくここまでたどり着いたな。お前には魔王と闘う資格が」

「魔王なんかじゃねえだろよ」

暗闇で男が喋った。

魔王は聞き覚えのある声に驚いた。

「……………勇者か」

「ん、まあ。もう嫌になったけどね、その呼び名。俺アディンね」

炎が次第に暗闇を照らし、アディンの姿が映し出された。

アディンは剣を持っていなかった。

「で、君はルビーナだ」

「!」

魔王は言葉を失っていた。

「ちゃんというじゃないかお姫様は」

アディンは魔王ルビーナを指差した。

「……だから何だ」

「うわぁっ!」

ルビーナは手をアディンに向けて突き出した。

アディンは吹き飛ばされ、扉にぶつかった。

「私は魔王! 強すぎるから魔王なんだ!」

「あいてー……確かに強いね」

しかしアディンはやはり平気で立ち直った。

「…何故生きてるの? あの時私は最大の魔力を放ったのに」

「あー……昨日は確かにやばかったな、俺も死にかけた。てゆーか

「ここも吹っ飛んだよな？魔法で直しちゃったわけ？」

アディンはキョロキョロと広間を見回した。

「ま…何にせよ君の魔力は化け物並つてことだな。だから皆勝手に君を魔王呼ばわりするわけだ」

「……その通りだ」

ルビーナは仮面の下で唸つた。

「私はたくさん人を殺してしまった…！こんな力のせいで！私は化け物なのよ、魔王なのよ！皆私を恐がるのよ！」

叫ぶ魔王の肩で、小さな多尾の魔物はフサフサの尻尾をルビーナの首元に巻いた。

ルビーナはそれを一瞥し、今度は落ち着いた声で言った。

「…魔物は私を恐がらない。力があっても、みんな一緒」

「俺も恐くねえよ」

アディンはさざりと言った。

「偽の魔王なんか恐くもなにもないね。あんな魔力なら俺は死なない」

ルビーナは少し驚いた。

が、肩に乗った魔物をゆつくりと下に降ろすと、奥へとやった。

「……………だったら」

突然、ルビーナの身体が光り始めた。

「私が魔王じゃないって証明しなさいよ!!」

ルビーナは光を両手に集め、アディンに向けて解放した。

「むっ……………」

アディンを強力な魔法が包み込んだ。

凝縮された魔力がアディンを焼き尽くした。

「……………はぁ……………はぁ」

ルビーナは最大級の魔力を使い、息を切らせていた。

「……………ぁ……………」

そして目の前に釘づけになった。

「……………ホラ……………国を滅ぼせたって俺は滅ぼせない」

アディンはルビーナを見下ろした。

「……………ぁ……………」

ルビーナはアディンであるはずの魔物を見上げていた。

翼と角、硬い剛毛の生えた凶々しい姿のアディンは、野太い声で話した。

「そうそう、それだよ。皆が魔王を見る目ってというのは」

正しく魔王に相応しい風格を目の当たりにし、ルビーナは絶句していた。

「俺が恐い？恐いだろ？魔王みたいだろ？」

アディンは巨大な顔をルビーナに近付けた。

ルビーナは腰を抜かしてその場にへたれこんだ。

「…魔王ってのはさ、そういうもんなんだよ。今君は恐怖を感じてるだろ？ほら、あいつもびっくりしてる」

アディンは部屋の奥に隠れた多尾の魔物を指した。

そして鋭い爪の生えた大きな指で招いて見せた。

「こっち来いよ。もう大丈夫よ」

多尾の魔物は、ててつと尻尾を使って二人のところへ走って来た。

アディンは手でそつと魔物に触れた。

「でもほら、恐がらないっしょ？君が言ったようにさ」

アディンは牙の並んだ口で笑った。

多尾の魔物は、何事もないように再びルビーナの肩へ乗った。

ルビーナは啞然としていた。

「……魔王なんていないんだよ。君が思い描く魔王の姿、皆が脅える恐怖の力。それが魔王なんだよね」

「……………」

ルビーナはアディンに聴き入っていた。

「俺さ、半魔なんだよ。半分だけ人間で、半分だけ魔物。しかもごつつ怖いのな」

アディンは親指で自分を指差した。

「昔から苦労したぜ……こんな姿だから誰も近寄らない、恐がる。まだちっちゃかった時はよかったけどさ、大きくなると姿も磨きがかかって恐くなるんよ。そうなりや皆こつ言っわな、『魔王を倒せ』つてよ」

アディンは一息入れた。

「世界中に逃げ回ってさ……こつやって人間の姿になれる魔法を会得するまでずつと一人だったんよ。まあ今でもあんまり変わらないけどさ、好き勝手やったよ。女の子追っかけ回して喧嘩して……」

ルビーナは俯いた。

すると多尾の魔物が顔に擦り寄った。

「そんな時にだ…いきなり勇者になれ、だ。笑っちゃまうよ、今まで魔王だったのが、魔王を倒す勇者になったんだからな」

いつのまにかアデインの声は元に戻っていた。

ルビーナは俯いていた顔をあげた。

そこには優しく笑う勇者がいた。

「まあ…魔王なんていなかったわけだから、もう勇者も要らないんだけどさ」

ルビーナは弱々しい声で言った。

「でも…私は…いつまでも魔王だ……」

「…まあそんなに魔王がいいならそれでいいけどさ」

と、ルビーナの仮面が取られた。

「あ——……………」

アデインは十五歳の少女の顔を覗き込んだ。

魔王などんでもない、まだ幼い顔立ち。

それでも彼女の緑の瞳は、強く、澄んでいた。

「俺こんな可愛い王女をほっとくほど野暮じゃないぞ？」

ルビーナは思わず顔を歪めた。

そしてアディンに飛び付いた。

「おとと……」

「う……ひぐ……っ」

フードがとれて、ルビーナの銀色の髪が見えた。

ルビーナはアディンの胸に埋まっていた。

「ひう……っ……私魔王じゃらい……ぐす……」

「うんうん……俺だって勇者なんかゴメンだね」

アディンはルビーナの肩をぽんぽんと叩いた。

もう片方の肩で、多尾の魔物が尻尾を振っていた。

「考えてみれば、ここの魔物は皆君を守ってくれたんだなあ……
悪い事したかな」

「うんっ……皆……友達だった……」

アディンは多尾の魔物の頭を撫でた。

「悪かったなあ…俺も襲われたからよ」

ルビーナはアディンから少し頭を離した。

「私がつ…国から追われて…ぐすつ…泣きながらここへやってきたら…皆私を守ってくれた…だから…私も…」

「成る程ね…余計魔物を引き連れた魔王に見えちまったわけか…」

ルビーナは頷いた。

「だから…私が戻ってもきつと皆…ひつぐ…恐がつて…」

「……健気だなあ全く……」

アディンは立ち上がった。

「ようし！なら俺が君の汚名を返上してやる！」

「え……？」

ルビーナはきょとんとアディンを見上げた。

「君は魔王じゃないってことを皆に証明すんだよ。俺に言わせりゃ、本当は君の顔見ただけで証明になるんだがな」

ルビーナは少し顔を赤らめた。

「いいか、俺の言う通りにするんだ……」

アディンはルビーナの肩を持って話し始めた。

王女

「……………」

王の間は、今度こそ静まり返っていた。

「……まさか、あのような姿とは……あれではどちらが魔王かわからないではないか……」

「どうやらあれでも半分程度の変身だったようですが……彼の力はあれが原因だったようですな……」

王は落ち着かないそぶりをした。

「もし彼が我々に牙を向けたら……我々に対抗の術はあるのか……」

秘書は少々遠慮気味に口走った。

「……魔王……ルビーナ様ならば或は……」

「しかしあれはもう手遅れだ！あの娘は既に魔物と一体化してしまった……！」

王は嘆いて手を額に当てた。

「ともあれ勇者……いえ、アディンの帰還を待ちましょう……」

「た……大変だあ……！」

突然、城中に響く叫び声が聞こえた。

同時に広間に一人の衛兵が走って来た。

王は頭をあげて、広間に飛び込んだ衛兵を見た。

「何事か!？」

「へ、陛下、魔王が!!」

「な…なんと!？」

秘書も驚きの声をあげた。

「く……護衛隊を出せ!私が出向く!」

「な、なりません王自ら……」

しかし王は従者達を従え、秘書を振り切って広間を飛び出して行った。

「……懐かしいな」

ルビーナは魔王の黒い格好のまま、仮面だけをつけずに歩いていた。近くにいる人々は彼女の姿を見て、畏れて近付かなかった。

「ま……魔王だ……」

「何故ここに……!？」

ルビーナは周囲を見た。

見るたびに人々は悲鳴をあげたりして逃げ出した。

ルビーナはただそれを眺めていた。

肩に乗った多尾の魔物がルビーナの鼻を尻尾でくすぐった。

「ふふっ……大丈夫。……大丈夫……」

ルビーナは魔物に笑いかけ、二度そう口にした。

「魔王よ!!そこを動くな!!」

叫び声がし、ルビーナは前を向いた。

百人余りの兵士がルビーナに槍を向けていた。

そのさらに後方には魔道士が控えていた。

「五年前のように、この国を滅ぼしに来たか!だがそうはさせんぞ
!」

「……私は!!」

ルビーナは高い声で叫んだ。

「私は魔王ではない！」

「お前のせいで五年前に俺の家族は死んだ！仇はとらせてもらっぞ！！」

前方にいた兵士の一人が強く叫んだ。

ルビーナは一瞬怯んだが、また叫んだ。

「私は、魔王ではない！！」

「貴様の力はこの国の厄災だ！」

ルビーナは叫んだ。

「私は——」

「魔王を倒せ！！！」

兵士達は槍を真つすぐルビーナに向け、構えた。

ルビーナは叫んだ。

だが声が出なかった。

「私——わたし——」

「待てえっ！！」

大きな声が場に響き、百人の兵士はピタリと止まった。

その中から、王が兵士を掻き分けて現れた。

「はぁ……はぁ……」

王はルビーナを見た。

ルビーナは涙を流していた。

「わたし……はっ……っ」

ルビーナは声を震わせ、その先を言えなかった。

多尾の魔物はルビーナの頬を掬った。

ルビーナも自身の涙を拭い、肩の魔物を撫でた。

「私は魔王じゃない……」

「ルビーナ……か……？」

王は震える声で言った。

「……はい……五年前、魔王にされたルビーナです……」

ルビーナは静かに話した。

「いえ……五年間ずっと魔王にされてきました。……力が強すぎた私をお父様が倒そうとして……その度に私には魔王への恐怖が植え付けられた」

王はルビーナをじっと見ていた。

「けど…私は何もしてない。五年前にあんなことがあったけど、私は何にもしてない。私は魔王なんかじゃない」

「ル…ルビーナ……」

「ふざけるな!!」

また、一人の兵士が叫んだ。

「お前が魔王である証拠などお前のあの力で十分だ!!」

「そうだ！貴様は破滅の力を持っている！」

「貴様は魔物を連れているではないか！」

「お前は魔物だ！」

次々に周囲の兵士達がルビーナに向かって叫び始めた。

王はそれを止めようとしていたが、誰も止まらなかった。

その時、その場に不気味な声が響いた。

「フハハハ……醜い人間共よ」

一同が一斉に上を向いた。

「そんな健気な可愛い女の子が魔王な訳無いだろ！」

声と共に、地響きが鳴り響いた。

いつの間にか周囲は薄暗くなり、何かが近づいて来た。

「な……な、ななんだあれは！！！！！」

兵士達がルビーナの背後を指差した。

ルビーナは振り向いた。

「本当の魔王はこの俺だ！俺が魔王！んでその女の子は魔王の俺に捕われていたお姫様だ！！わかったかボケ共！お前ら魔王魔王うるせーんだよ！」

とてつもなく巨大な悪魔の姿でアディンはべらべらと叫んだ。

野太い声が町中に響き渡る。

あちこちから悲鳴が上がり、人々は逃げ惑い始めた。

「な……なんだと……！？」

「あれが魔王……本物の魔王か！？」

兵士達は後退りをしてアディンを見上げた。

「待て……じゃあ五年前のあの事件は……！王女の力はなんだったのだ？！」

ある魔道士がルビーナとアディンを見比べて言った。

一同がハッとしてルビーナを見た。

ルビーナは苦しげに口を開いた。

「…それは」

「——俺が王女を狙った時についてに国を破壊してやろうと思ったのさー!!」

ルビーナは思わずアディンの顔を見上げた。

アディンは不気味に笑いながら続けた。

「なのにお前らときたら、あれを王女の仕業だと勘違いしやがった！お陰でお姫様は魔王呼ばわりだ、この俺っていう魔王がいるにも関わらずにな！」

「お……お前……」

ルビーナが言おうとする前に、後ろから大きな叫び声があがった。

「貴様……！！貴様が俺の家族を殺したのか……！」

「……ハハハハ！その通りだ！」

「な……何と言うことだ……！」

王が声をあげた。

「ルビーナ！こっちへ来るのだ！！」

「えっ……あっ」

ルビーナは王に体を掴まれ、兵士達の中へと引きずり込まれた。

「お、お父様……！？」

「すまなかった……！お前は魔王などではなかった、むしろ魔王に狙われていたというのに、私は何と言うことを！」

ルビーナは咄嗟に口を開こうとした。

「ち……あ………」

が、何も言わなかった。

王はルビーナを抱き抱え、アデインを睨み付けた。

「皆の者！王女ルビーナは魔王などではなかった！真に倒すべき魔王はあやつだ！魔王を打ち倒せ！！」

兵士達はルビーナを見て困惑した表情を見せた。

だが、巨大な悪魔のようなアデインと見比べて、叫んだ。

「…何もかも、あの魔王に騙されたということか！？」

「我々は王女に何と云うことをしていたのだ…！」

兵士達は一斉にいきり立った。

「今こそ本当の魔王を打ち倒さねば！！王女をお守りしろ…！！」

ルビーナは何も言えず、その様子を見ていた。

アディンは兵士達を見て魔王らしい笑い声をあげた。

「グハハハハ！！お前らにこの魔王が倒せるものか！見るがいい、魔王のすごい力を…！」

アディンは足元の家を踏み潰そうと巨大な足を上げた。

「…ちょ…早く逃げろよ、ひえーじゃねえだろ…！！……」

そんな声が聞こえたのは、ルビーナと多尾の魔物だけだった。

ほんの少し間を置き、アディンは家を一つ踏み潰して見せた。

「おお…何と非道な…！」

「フハハハハ！！どうだ！恐いか！？俺が魔王だからな、魔王…！」

アディンは高らかに笑って見せた。

「これ以上我らの国を壊されてなるものか！！行くぞおお…！！」

兵士達は、アディンに向かって一斉に突撃していった。

魔王の最期

『まず、素顔で皆の前に出るんだ。大丈夫だよ、ルビーナ目茶苦茶可愛いから。君を魔王とか言う奴が魔王だ』

『何照れてんだよ。率直な感想だぞ。いいか、はっきり言ってお前は……いや、ここは置いてこう』

『んで大声で

「私は魔王じゃない」って叫ぶんだ。そりゃ良心のある奴ならわかってくれるはずだからな』

『まあでもそれでも誰も聞き入れないかもしれない。そしたらいいか、俺が魔王になってやる』

『いやいや、姿戻るだけで本格的にブツ壊すわけじゃねえよ。俺仮にも勇者よ？』

『魔王になった俺を、君の力で倒すんだ。そしたら君の強大な力は国を救ったことになる。誰も魔王なんて呼ばなくなるさ』

『へ？馬鹿言え、全力でやりやいいんだよ五年前みたいにな。俺はそんなんじゃ死なないさ、なんだって俺は——』

『俺か？まあ俺はどうか行くさ。魔王がずっといるわけにもいかねえからな。王女がもらえないのはちよつと、いや激しく残念だけど』

『気にするなよ、所詮こんな生れつきさ。お前は幸せに暮らさなきゃいけないぞルビーナ——』

ルビーナはまだじっとアデインを見ていた。

アデインの周囲には兵士や魔道士が戦っていた。

「いてっ……いてえなデメエ！」

次々に槍や魔法の攻撃がアデインに浴びせられる。

だがアデインはものともせず、足元の兵達をあしらっていた。

一人の魔道士が王のところへやってきた。

「だ、駄目です！我々のどんな攻撃も魔王には通用しません！」

「うむう……何と言う強さ……凶々しい姿だ！」

王は歯を食いしばってアデインを見ていた。

そのアデインは王の方を向いた。

「ハッハー！！そりやもう魔王だから俺、魔王！！魔王な」

「ぬう……どこかで聞いたような口調を……そうだ勇者は……勇者アデインはどこだ！？ルビーナ、お前を助けに行っただけではなかった

のか!？」

「……………」

ルビーナは、何も言わなかった。

巨大な体にいくつか魔法を受けながらアディンはルビーナを見た。

「どうした、俺はこんなことじゃ死なないぞ!! もっと強い力じゃないとな!! あイテッ」

ルビーナは動かなかった。

苦しげにアディンを見つめていた。

「俺を倒して! 魔王を消すんだよ! 魔王を!」

ルビーナは俯いた。

アディンはついに叫んだ。

「魔王を打ち倒せっ!!!!!!!!!!」

巨大な音波に一同は思わず停止した。

「……お父様、このコを持っで」

「は……? ……うわっま、魔物!？」

ルビーナは肩に乗っていた多尾の魔物を王に渡した。

王は手を延ばしたが、多尾の魔物は王に擦り寄って行った。

ルビーナはアディンの方へと歩いて行った。

兵士達はそれを見つめていた。

「みんな離れて」

「……………あ……………」

ルビーナが小さく言うと、兵士達は急に怯えたようにその場から離れ出した。

ルビーナはアディンを見上げた。

「……………さあ、魔王を倒してみろ」

アディンはルビーナを見下ろして言った。

ルビーナは手を翳した。

ルビーナの全身が強い光に覆われた。

「あ……………あれは五年前の……!?!?」

見ていた兵士が叫んだ。

「……………ではやはり王女は……………」

ルビーナはさらに力を込めた。

ルビーナの両手に光が集まり出した。

「ま、間違いない！あの時の力だ！！」

「逃げろ！殺されるぞ！」

兵士達は逃げ出そうとした。

「黙って見るや！！！！」

アデインが怒鳴った。

兵士達はピタリと止まった。

「ル……ルビーナ……」

多尾の魔物を頭に乗せた王は、動かずに二人を見ていた。

「……………！！！！」

ルビーナの光が解放された。

光はアデインの体に襲い掛かった。

周囲はまばゆい光に包まれた。

本当の魔王

静けさが響いた。

その場にいた者は、光につぶっていた目をゆっくりと開いた。

「……う……グ………」

アディンは全身に傷を負って、未だそびえ立っていた。

「……っはぁ……！……はぁはぁ………」

ルビーナは膝をついた。

その周囲は魔法の力で破壊されていた。

その場にいた者は皆、二人の様子を見守っていた。

「……フ……フフフ」

アディンは低い声を出した。

「俺の……負け……だ………」

ずーんとアディンは膝をついた。

続けて斜めに傾きながら全身を横たえ、大きな地響きが鳴った。

ルビーナはアディンが倒れる様子をじっと見ていた。

「た……倒したのか……？」

兵士達が恐る恐るアディンに近づいていく。

「や……やった……やったんだ！魔王を倒したんだ！」

「王女の力が……魔王を倒したのか……？」

一気にわあっと歓声があがった。

「王女は……王女は魔王ではなかった！本当の魔王を倒した我らの救世主だ！」

「本当の魔王は打ち倒されたんだ……！」

一同は口々に打倒魔王の喜びと王女の賛美を言った。

ルビーナは、倒れたアディンの前で息を切らせて俯いていた。

王がルビーナに近づいた。

「ルビーナ……大丈夫か？」

後ろでは兵士達が叫んでいた。

魔王を呪う声も聞こえた。

「……っ」

ルビーナは歯を食いしばって叫んだ。

「魔王なんて初めからいないっ！……！！！」

一瞬にして場が静まり返った。

ルビーナは必死に抑えるようにもう一度声を出した。

「魔王なんて……いない……」

王がそつとルビーナの肩に手を置いた。

「ルビーナ……すまなかった。もう魔王はいない……お前は魔王などではなかった……」

「……違う……違う」

ルビーナはゆっくりと首を横に振った。

「彼だって魔王なんかじゃない……」

「何……？」

「彼は勇者よ……勇者アディンよ……」

ルビーナは視線で横たわるアディンを指した。

「ゆ……勇者アディン！？」

聞いていた者が驚嘆した。

「な、何を言うか、勇者アデインは魔王を倒しに……」

王はそこまで言っただけでハッとした。

「ええ…魔王にされた私を倒しに来ました。でも…」

ルビーナは王達の方に振り向いた。

「アデインは……私は魔王じゃないって言ってくれた。そして私の代わりに魔王になって…私を助けてくれた！」

「そ…そんな馬鹿な…この魔王が…勇者……？」

兵士達は困惑した表情を見せて、アデインを見た。

「し、しかしあの姿は本当の魔王そのもの……」

兵士の一人がそう言うと、ルビーナは思いきり叫んだ。

「本当の魔王って何！！？あんな恐ろしい姿をした人間！？それともこんな恐ろしい力を持った私が魔王なのっ！？皆の魔王はただの恐怖の対象じゃないの！！！」

誰も、何も言わなかった。

ルビーナは震える声で続けた。

「…魔王なんて……初めからどこにもいない……」

「ルビーナ……おッ？」

多尾の魔物が王の頭から飛び降り、ルビーナの方へ駆けて行った。

ルビーナは魔物をそつと抱き上げた。

「私が魔物を連れているから……私が強すぎる力を持っているから。だから皆私を恐がるけど」

ルビーナは立ち上がった。

「信じて……私は何もしない、誰も傷つけたくない。こんな力欲しくなかった」

その場にいた者は沈黙していた。

ただ強すぎただけの健気な女の子を見ていた。

「馬鹿……んな……こと……言つなよ……」

その時弱く低い声が響いた。

ルビーナはパツと後ろに振り向いた。

アディンが弱々しい声でしゃべっていた。

「勿体ねえだろ……」

「アディン！大丈夫か！？生きてるの！！？」

ルビーナは未だ巨大な姿のままのアディンに駆け寄った。

兵士達は皆、恐れてそれを見ていた。

「ハハ……ちょっとヤバイかも……」

「し…死なないんだろう？私の力でもお前は壊れないんだろう！？
なんで人間の姿に戻らないの！？」

アディンはぴくぴくと指を動かした。

「魔力が……もう、な……流石に…三回喰らったら身が……持たねえや……」

「そ…そんな！死なないって言ったじゃない！！」

ルビーナは必死に牙の並んだアディンの顔に語りかけた。

アディンは牙を震わせて笑った。

「ハハ……それより…さ…よかったな……もう……お前は魔王じゃないぞ……」

その時、とてもアディンは魔王には見えていなかった。

周囲の者も、いつの間にか彼に恐怖を抱くのを忘れて見入っていた。

「う…うん…もう私は魔王じゃない……皆ちゃんと解ってくれた……！」

「フ……フフ……だろ？……お前は……可愛いからなア……」

ルビーナは頬を濡らしながら笑って見せた。

アディンも弱く笑った。

「……アディン……？」

「あ……ヤベ……そろそ……ダメ……かな……」

ルビーナは笑わなくなった。

「ま……待ってよ！勇者でしょ！？勇者アディンなんでしょ！？」

「勇者……？……違うよ……俺は……ただの、嫌われもんさ……」

アディンの声は益々弱々しくなっていた。

「ゆ……勇者殿……！」

王がアディンのところへ駆け付けた。

「……貴方は……真の勇者だ！この国を魔王から……我らを本当の魔王から救ってくれた！」

王はひざまづいた。

すると、我に返ったように周囲の兵士達もその場にひざまづいた。

「情けない……！……魔王は我々だった……！我らの醜い心が魔王を作り

出したのだ……」

「……そりゃ……よかった……よ……ルビーナ」

ルビーナはアディンの大きな目を見た。

「お前が……魔王……倒した……だぜ……」

ルビーナは頷いた。

「……惜しいなア……せっかく君を……貰え……思った……に……」

「………!!」

ルビーナはいきなりアディンの顔に抱き着いた。

「ル……ビー……」

「お前は私を助けてくれた……だから、今度は私がお前を助ける……」

ルビーナの体が再び光を放ち始めた。

しかし優しく包むような銀色の光だった。

「お………おお………！何と温かい……！」

「これが……王女の力なのか……？」

銀色の光はアデインを包み始めた。

しかし魔力を使い果たしたルビーナの光は、弱いものだった。

「く……っ……！」

ルビーナは力を込めた。

しかし光は弱くなるばかりだった。

その時、ルビーナの肩をしっかりと手が掴んだ。

「私の魔力も使ってくれ……！」

「お……お父様……」

ルビーナは王の顔を見上げた。

王は必死な顔でアデインを見ていた。

「こんなことを頼める義理ではないが……お前の力が必要だ……。頼む、勇者殿を救ってくれ……！」

ルビーナは頷いた。

体に力が戻って来ていた。

大勢がそれを見守っていた。

「……！！！」

ルビーナの光が、輝きながら全てを照らした。

勇者と王女

「……………」

「なんだ、さつきからずっと喋らないな」

明るい光が差し込む窓辺に座ったルビーナは言った。

「…あのさ、暇なんよ」

その近くで同じように座るアディンが、膝を揺らしながら答えた。

床で寝ている多尾の魔物が、振動でぴくりと動いた。

ルビーナはくすつと笑った。

「さつきも言ったじゃない、これで5回目だぞ」

「それぐらい暇なんだよ」

アディンはたらたらと返した。

「どっちにしたってまだ何も出来ないだろう。体がまだ治ってないんだから」

「いやいや、俺の再生力なめんなよ？勇者よ俺？流石勇者様ってくらい復帰早いよ？」

アディンはそう言つと踏ん反り返った。

「…本当に助かってよかった」

ルビーナは外を眺めながら言った。

アディンは少しルビーナの横顔を見ていた。

ルビーナはアディンに振り向いた。

「アディンがいなかったら、また不安になってしまいそう」

「……そっか」

アディンは同じように外を向いた。

「正直俺も不安というか、今安心してるからなあ」

「アディンも？」

アディンは目を細めて遠くを見た。

「世界中行って色々な奴と会ったけどさ。皆俺がちょっと正体ばらすと恐がっちゃうのよ。何にもしなくてもな」

ルビーナはアディンを見つめた。

「勇者に選ばれて来た時も同じだったよ。勇者勇者て騒いだところで、結局化け物は化け物だ」

「……そうだな」

アディンはくるりと体を横にし、顔をルビーナに向けた。

「だから……まあ、良き理解者が出来たってところかね」

「それだけ……？」

ルビーナは不意に悲しそうな顔をした。

「ただそれだけで私が欲しくなったの……？」

アディンは少し焦った様子を見せた。

「い……いやんなわけないだよ、そりゃ女の子のケツ追っかけ回すのは好きだけどそれは今までの欲求不満の現れというか、ルビーナはまた別の意味でだな……」

と、ルビーナの口が途中で緩んだ。

アディンは口を開けたまま停まった。

「ふふっ……」

「……そこんこは魔王らしいんかよオイ……」

アディンは口を尖らせた。

ルビーナは笑って立ち上がった。

そしてアディンの目の前に立った。

「…魔王の手から勇者に救われたお姫様は、勇者とめでたく結ばれました」

「……………」

アディンは虚を突かれた顔をした。

ルビーナは手を差し延べた。

「…アディンが行くなら私も何処へだってついていくよ」

アディンは静かにルビーナの手を取った。

そして、にやりと笑った。

「…………言っ た な？」

ルビーナもにと笑った。

アディンはルビーナを抱き寄せた。

「いやはやなんとも…………結果が良かったからというべきなのでしょうか…………」

王の広間で、秘書は齒痒い調子で語った。

「憎むべきを間違えていたとは…我々はなんと愚かだったのか…………」

「うむ……勇者殿には感謝せねばならん」

王は感慨深く言った。

「彼の望み通り、勇者殿には王女を遣った。いや、ルビーナもそう望んでいた。我々は何も言うまい」

「ええ…言えるべき立場ではございません……」

二人はため息をついた。

「ともあれ、魔王はもういない。そして、これからも現れることもあるまい。勇者殿がいる限り……」

と王がいかけた瞬間、広間、というより城全体が激しく揺れ動いた。

王城は突如騒然となった。

「な……何事か!？」

その時広間に何人もの兵士が飛び込んで来た。

「へ、陛下、勇者殿が!」

「な……何と!？」

アディンは街並みを見渡した。

「ハーハツハツハ！！やっぱりこの眺めがイイね！」

「すごい！！！」

アディンの肩に乗ったルビーナも街を見下ろした。

ルビーナの肩には多尾の魔物が乗っている。

「ゆ、勇者殿ーッ！？」

「オ？」

アディンは崩れた城の一部を見下ろした。

割れ目から王が叫んでいた。

「ななな何をなさつておられるか！」

「あーすみませんお父さん、やっぱり俺勇者とか向いてないみたいなんで。転職してきますわ」

アディンは爪の生えた巨大な手を振った。

「そ、そんな！勇者殿にはこの国を……」

「国はいらん！俺が欲しいのは可愛い王女だ！！王女ルビーナ！魔王じゃないぞ」

ルビーナはそれを聞いて少し顔を赤くした。

「てわけだからお父さん頑張つてなー！気が向いたら帰るからさ」

アディンはずんずんと巨大な体を動かし始めた。

大きな脚が山を歩いた。

王がまだ叫んでいた。

「ゆ…勇者殿…ルビーナー」

ルビーナは振り返った。

そして笑って王に手を振って見せた。

「さて、どこ行ってみるよ？」

アディンは肩のルビーナに話しかけた。

「そうだな……アディンの生まれた場所は？」

「ベタナリクエストだなあ。まあいいけど。すっごい深い森だぞ？」

多尾の魔物が、ルビーナの口元を尻尾でくすぐった。

それを見て、ルビーナは答えた。

「じゃあそこへ行くぞ！」

「オツケ。よし、んじや落ちないようにしろよ?」

「うん!」

魔王のような姿をしたアディンは、ずんずんと大地を進んで行った。

ルビーナは、幸せな顔で笑っていた。

勇者と王女（後書き）

拙い脈絡の無い話です。こんな話でもダメ出し下さると嬉し過ぎず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7730d/>

DEVIL HERO

2010年10月19日18時46分発行